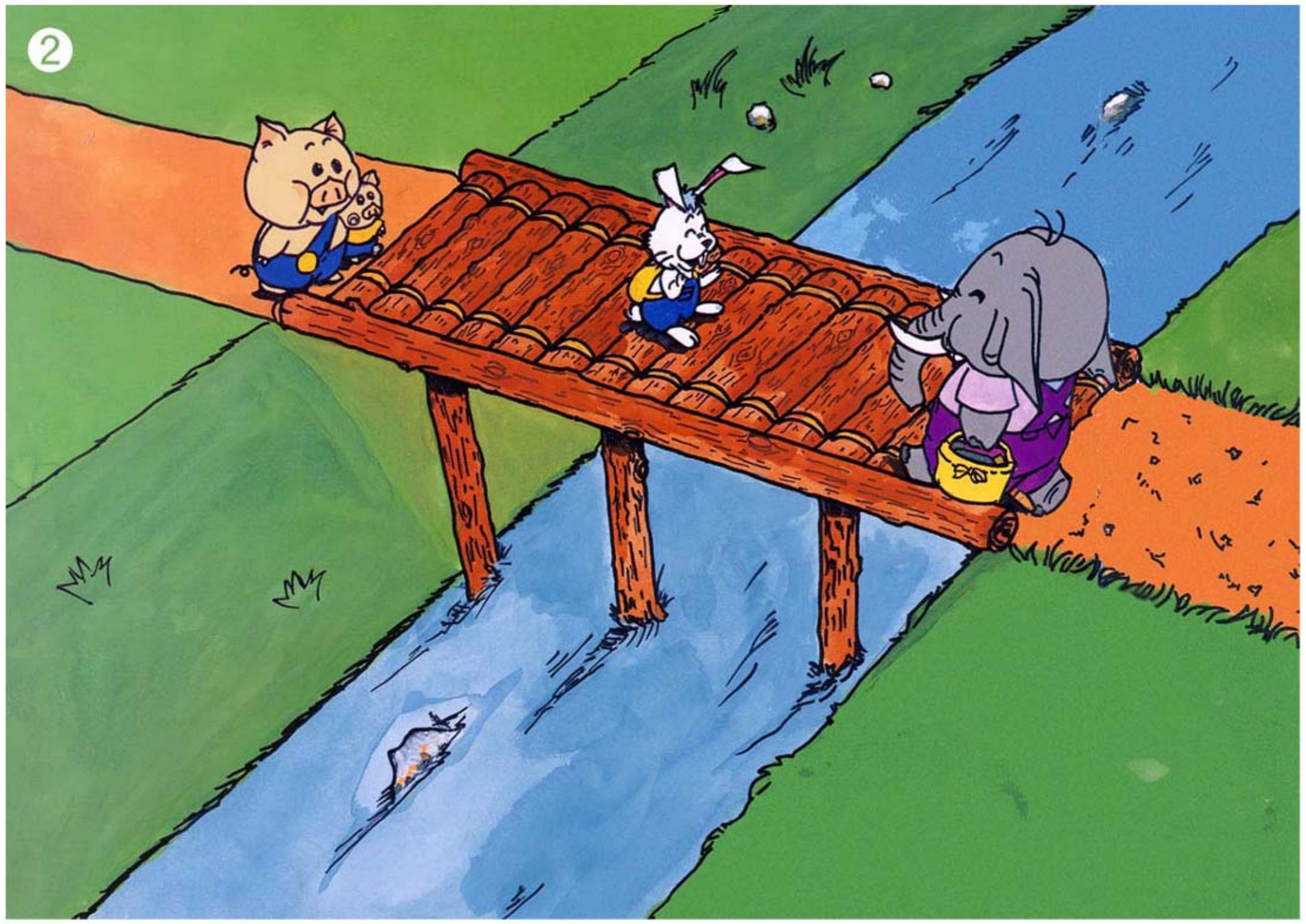
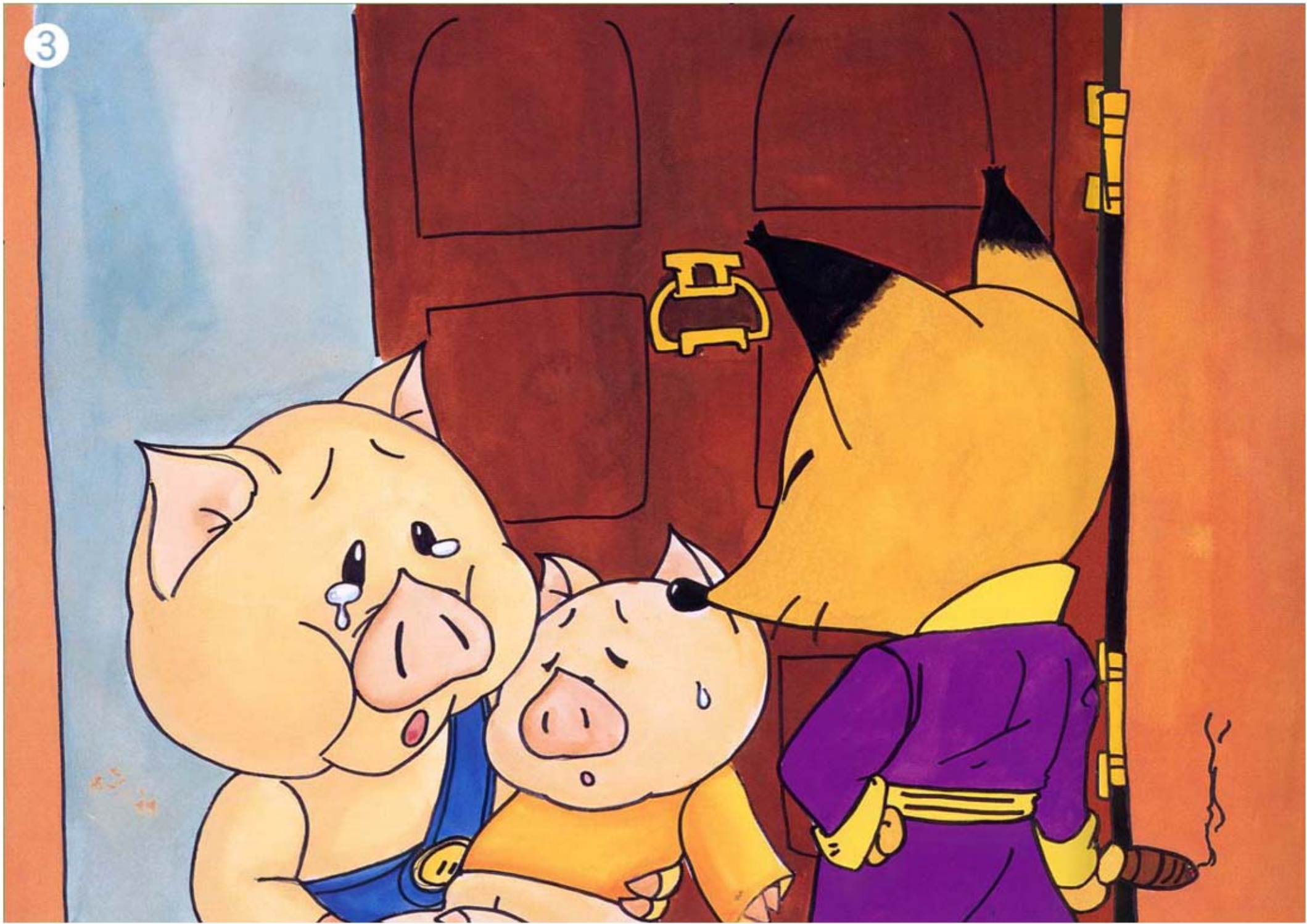


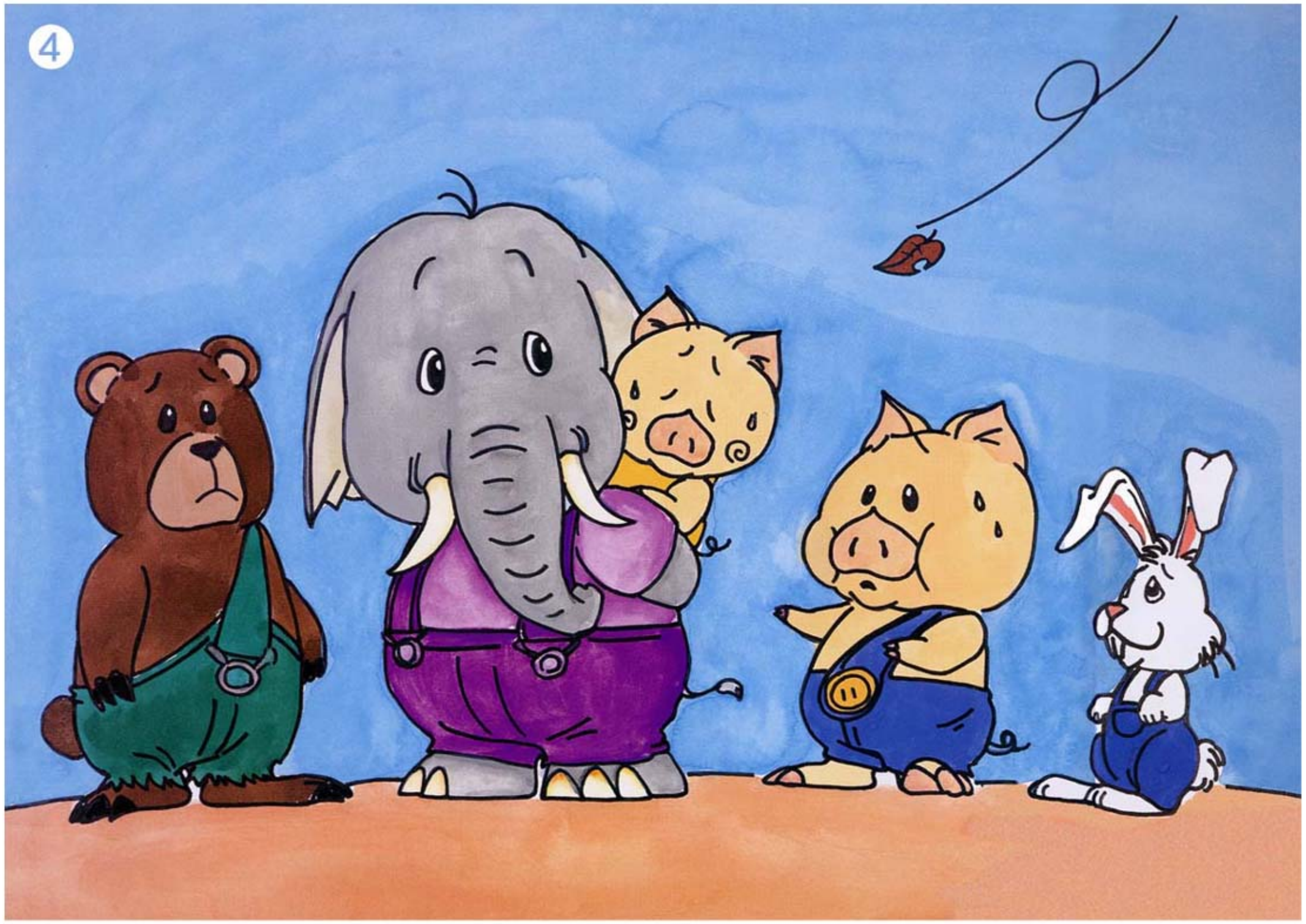
しあわせの
ふうせん

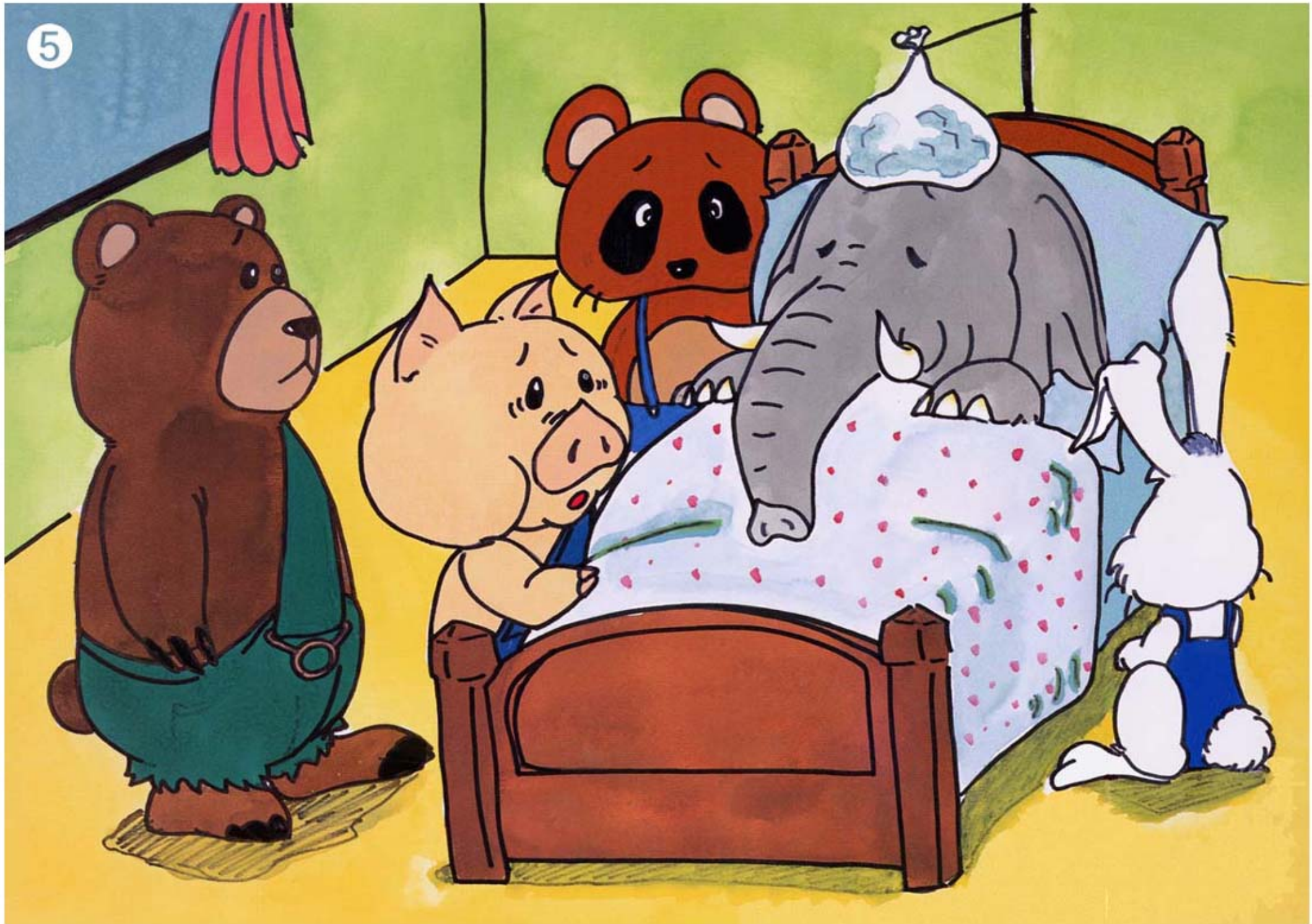
あおい



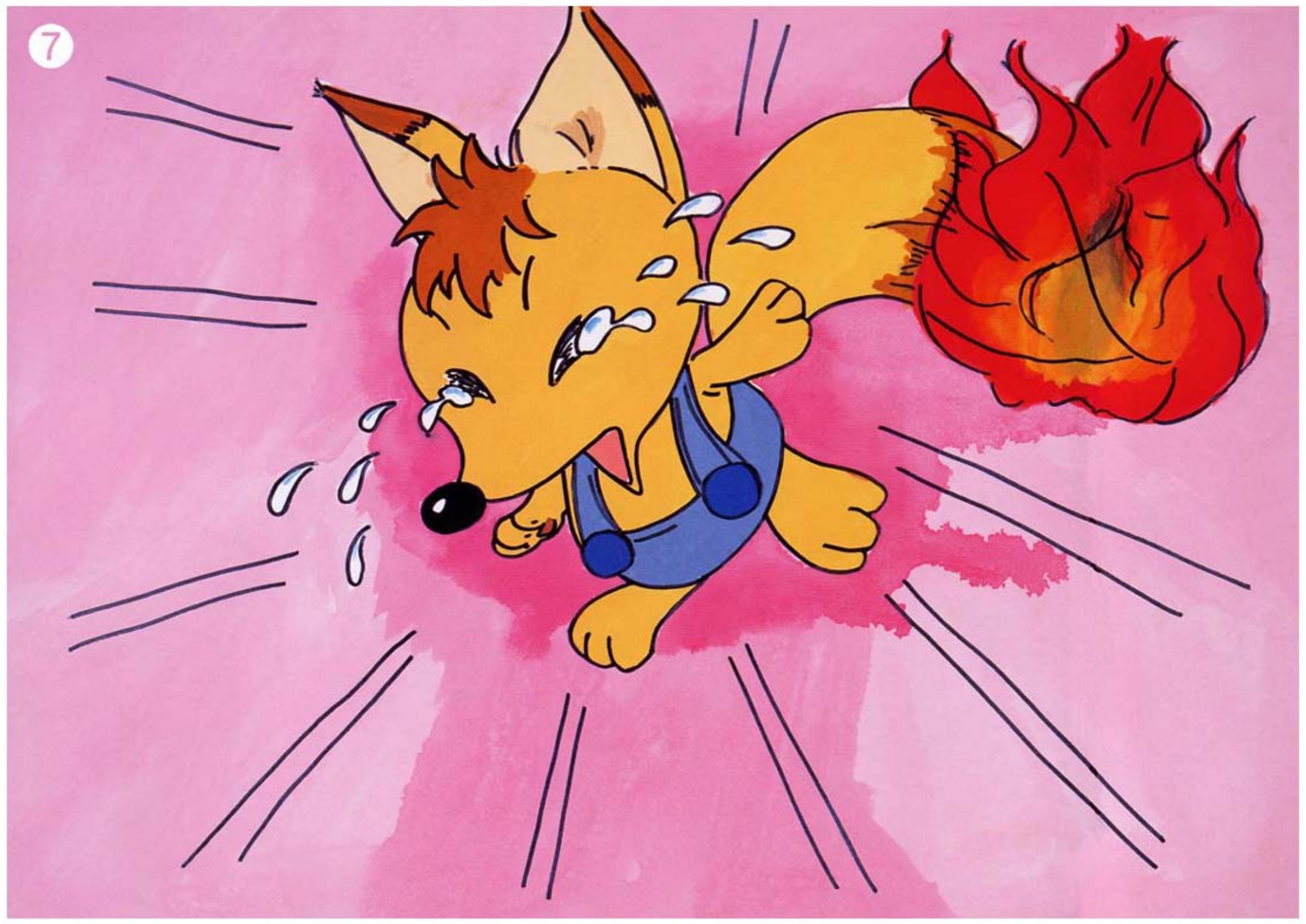






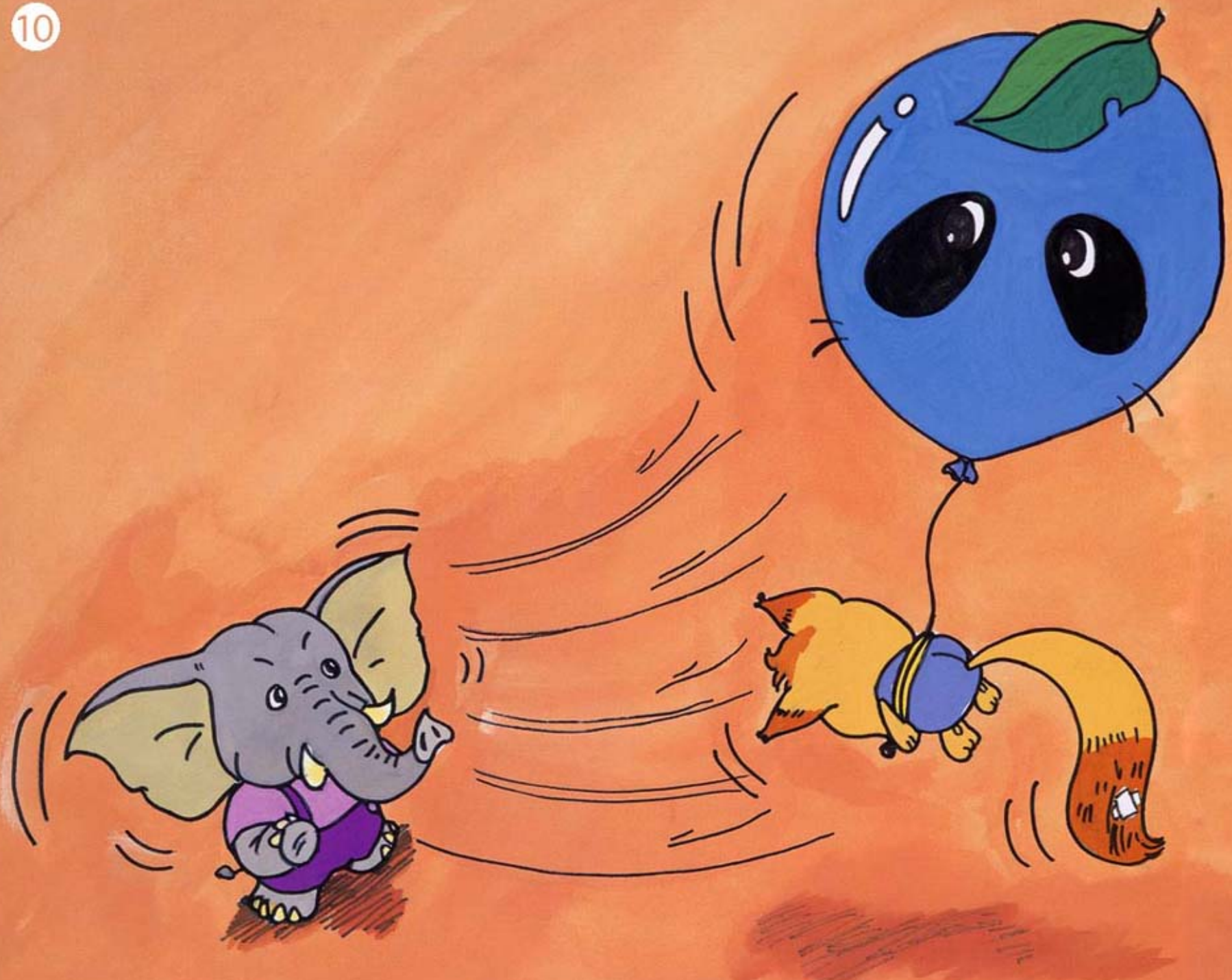














「しあわせのあおいふうせん」

点線で切り取り、各場面の裏に貼ってお使いください。

「しあわせのあおいふうせん」

あるところに、どうぶつたちのまちがありました。まちのまんなかには、かわがあり、きのはしがかかっています。どうぶつたちは、たいへんなかよくくらしていましたが、こまったことにキツネさんだけは、みんなとなかよくしようとしませんでした。そうそう、こんなことがありました。

かぜがふく、さむいあさのこと。ブタさんのこどもがびょうきになり、キツネさんにクルマでびょういんまでつれていってくれるよう、なんかいもたのみました。このまちで、クルマをもっているのはおかねもちのキツネさんだけなのです。しかしキツネさんは、「あさはよからうるさいなあ。まだねむたいんや。」といって、ドアをしめてしまいました。びょういんは、はしをわたったとおくにありました。「エーン。エーン。こどもがしんでしまうよー。」とうとうブタさんはなきだしてしまいました。

ブタさんのなきごえをきいて、きんじょのどうぶつたちがあつまってきました。すこしでもはやく、びょういんにつれていかないとこどもがかわいそう。「わしやったら、おんぶできるし、つれてったるわ。」ちからもちのゾウさんがいいました。さむいかぜがふくなか、ゾウさんは、なんとかびょういんまでこどもをつれていきました。おいしゃさんにみてもらい、ブタさんのこどもは、すぐにげんきになりました。

ぶたさんは、うれしくてゾウさんのおウチに、おれいをいいにいきました。すると、ゾウさんは、かぜをひいてねていたのです。ゾウさんがびょうきになってしまったのをきいて、みんなあつまってきました。ウサギさんがいいました。「また、だれかがびょうきやケガをしたら、どないしよう。ゾウさんばかりたよられへんで。」

クマさんがいいました。「みんなでおかねをだしあって、きゅうきゅうしゃをかったらどうやる。」ほかのどうぶつたちもさんせいでした。しかし、キツネさんは、「じぶんのクルマがあるから、きゅうきゅうしゃがなくてもこまらへんわ。」といっておかねをだしませんでした。みんながおかねをださないと、きゅうきゅうしゃがかえません。ほかのどうぶつたちは、かなしいきもちになりましたが、どうすることもできませんでした。

そのひのよるから、あめがまちにふりはじめました。あめは、つぎのひも、またつぎのひも、はげしくふりました。やっと、あめがあがったひに、たいへんなことがおこりました。キツネさんのこどもが、だいどころのガスコンロのひをつけてあそんでいたら、しっぽにおおヤケドをしてしまったのです。キツネさんは、すぐにこどもをクルマにのせ、びょういんにむかいました。

クルマがかわにちかづき、はしのところにきたときです。キツネさんは、アツとおどろきました。おおあめで、はしがながされていたのです。「どないしよう。かわのむこうにわたられへん。」そのとき、たまたまタヌキさんとゾウさんがとおりかかりました。キツネさんは、タヌキさんとゾウさんに、こどもをたすけてほしいとたのみました。

ゾウさんがいいました。「タヌキさん、ほつといたらええやん。ブタさんのこどもがびょうきのときにはキツネさんはなにもたすけてくれへんかったで。」やさしいタヌキさんは、いいました。「ゾウさん、こどもがケガしてるんやで。ほつとくわけにはいかへんやないか。」そういと、タヌキさんはあたまにはっぱをいちまいのせ、りょうてをあわせると、じゅもんをいいました。「チチンブイブイのブイ。ふうせんになあれ。」

あーらふしぎ。タヌキさんがあおいふうせんにばけてしまいました。キツネさんが、こどもをいとにむすぶと、ふうせんがいいました。「ゾウさん。びょういんにむかって、そのおおきなみみをウチワのようにあおぐんや。」ゾウさんは、おもいっきりみみをふりました。タヌキさんがばけた、あおいふうせんは、キツネさんのこどもといっしょに、びょういんにむかってどんどんとんでいきました。

それから、しばらくたってからのことです。あたらしいコンクリートのはしができました。どんなに、たくさんあめがふっても、もうだいいじょうぶです。はしができたときには、みんなが、タヌキさんのようなやさしいきもちをわすれないようにと、たくさんあおいふうせんをとばしました。

ふうせんは、どんどんたかくあがって、やがてあおいそらにすいこまれていきました。」